

2. 看護学研究科の教育

令和元年度は、看護学研究科看護学専攻博士前期課程および博士後期課程、共同災害看護学専攻博士課程の2専攻3課程をもつ研究科として改組後、6年目を迎えた。

入学式後の2日間は、Ⅰ. 大学院看護学研究科 入学生との懇談会、Ⅱ. 事務局オリエンテーション、Ⅲ.3 課程共通 キャンパスライフ等について、Ⅳ. 教育研究環境（学内LAN、自己学習室のPC使用等）について、Ⅴ. TA・RA オリエンテーション、の3課程合同オリエンテーションと、課程別オリエンテーションを実施し、スタートした。

以下、各課程で本年度取り組んだことを中心に記載する。

1) 看護学専攻博士前期課程

博士前期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本研究科の課程の目的、博士前期課程の目的、カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針）、ディプロマポリシー（修了・学位授与に関する方針）に沿って活動を行った。教育課程においては、令和2年度より開設される共創看護学領域を含めた履修モデルの整備、令和3年度に新設予定の災害・国際看護学領域、母性看護学領域のカリキュラムの構築、ディプロマポリシーの評価指標の作成と修士生への調査、学位論文審査基準の作成を行なった。

(1) コース別履修モデルの整備

学生自身が、資格取得に必要な科目、また自らの能力を向上するための講義選択の目安として活用することを目指し、カリキュラムポリシーに沿って、令和2年度に開設する共創看護学領域を加えて、CNSコース、研究コース、実践リーダーコースの履修モデルを整備し、令和2年度入学生から活用できるよう整備した。大学院の拡充、教育・研究の質向上を目指し、多様な学修の機会の充実を図ることを目指し、令和3年度に研究コースとして新設する『母性看護学領域』『災害・国際看護学領域』のカリキュラムを整備した。さらにカリキュラムツリーの作成を行い、ディプロマポリシーの能力と科目の関連を検討するためにカリキュラムマップの作成を進めている。次年度はカリキュラムマップをもとにディプロマポリシーの能力と科目の関連を分析・評価し、カリキュラムの充実を図る必要がある。

(2) 母性看護学領域の設置に向けて

今年度戦略的研究助成プロジェクトに採択され、新たな研究コース・実践リーダーコースとして『母性看護学領域』のカリキュラムを構築した。母性看護学領域では複雑で多様化する社会環境を背景として女性やその家族が直面している健康課題や看護実践上の課題の探索及び解明に向けて研究的に取り組む能力をもった人材の養成を目指し、令和3年度入試より学生募集を行うこととなった。次年度は母性看護学領域のカリキュラムツリー、カリキュラムマップの整備を行なう必要がある。

【母性看護学領域 新設の専門科目】

- 女性健康看護論 2単位 1回生前期（新）
- 女性健康支援論 2単位 1回生後期（新）
- 子育て包括ケアシステム論 1単位 1回生後期（新）
- 女性の健康危機マネジメント論 1単位 1回生後期（新）
- 母性看護フィールド演習Ⅰ 1単位 1回生後期（新）
- 母性看護フィールド演習Ⅱ 1単位 2回生前期（新）
- 母性看護学研究方法Ⅰ 2単位 1回生後期（新）
- 母性看護学研究方法Ⅱ 6単位 2回生通年（新）

(3) 災害・国際看護学領域の設置に向けて

人間の安全保障を理念とし、日本や世界で求められている災害看護に関する課題に的確に対応・解決し、国際的学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心自立に寄与する人材の養成を目指し、博士課程リーディングプログラムで蓄積してきた資産を有効活用し、グローバルな授業展開を行なう新たな研究コース・実践リーダーコースとして『災害・国際看護学領域』のカリキュラムを構築した。令和3年度入試より学生募集を行うこととなった。次年度は災害・国際看護学領域のカリキュラムツリー、カリキュラムマップの整備を行なう必要がある。

【災害・国際看護学領域 新設の専門科目】

- 災害看護論 2 単位 1 回生前期 (新)
- グローバル社会看護論 2 単位 1 回生前期 (新)
- 災害・国際看護方法論 2 単位 1 回生後期 (新)
- 感染症看護セミナー1 単位 1 回生後期 (新)
- 環境衛生看護セミナー1 単位 2 回生前期 (新)
- 共生社会看護セミナー1 単位 1 回生前期 (新)
- 人道支援看護セミナー1 単位 2 回生前期 (新)
- 災害看護管理セミナー1 単位 2 回生前期 (新)
- 災害・国際看護学研究方法 I 2 単位 1 回生通年 (新)
- 災害・国際看護学研究方法 II 6 単位 2 回生通年 (新)

(4) 国際性・学際性強化への取り組み

インディペンデントスタディ、看護コンサルテーション論、老人看護展開論Ⅱのゲストスピーカーとして、3名の講師を招聘した。また、疫学研究方法は、国際医療福祉大学の Ngatu Nlandu Roger 先生が非常勤講師として講義を担当した。次年度も引き続き国際性・学際性を強化していく。

表 ゲストスピーカーの招聘

日程	講師	テーマ	科目名
6月26日	Pamela Minarik 教授 (米国 Samuel Merritt Univ.)	「看護コンサルテーションの理論と実践」	看護コンサルテーション論
6月25日	Pamela Minarik 教授 (米国 Samuel Merritt Univ.)	「Palliative Care: Helping People Cope」	インディペンデントスタディ
11月25日	Line Hurup Thomsen (ロガランド高齢者介護施設・在宅ケア開発センタープロジェクトマネジャー)	「ノルウェーにおける高齢者の系統的観察とコミュニケーションアルゴリズムを活用した教育訓練シミュレーションの実際」	老人看護展開論Ⅱ

(5) 修了生を対象とするカリキュラム評価に関する調査の実施

今後のカリキュラムの改善、教員の教育力の向上に取り組むと共に、新たなコース・領域を設けることについての検討や看護学研究科の教育の質保証に役立てることを目的に、平成 26 年～30 年度の修了生 69 名を対象にカリキュラム評価に関する質問紙調査を実施し、38 名からの回答を得た。次年度は回答結果を分析し、今後のカリキュラム改善に活かしていく計画である。

(6) ディプロマポリシーの評価指標の作成

今年度は本研究科の 6 つのディプロマポリシーの評価指標を検討し、各ディプロマポリシーを 5 項目の指標で評価することが決定し、令和元年度の修了生を対象に調査を行なった。次年度以降も継続して修了時に調査を実施し、分析結果をカリキュラム評価、教育の質保証につなげる。

(7) 学位論文審査基準の改正

学位審査基準の公表に対応すべく博士前期課程の学位論文審査基準について見直しを行い、6 項目の審査基準に改正した。看護学研究科修士学位審査に関する内規を細則として論文審査基準を含め規定した。次年度は、細則について教員・学生への周知を行う。また、学位審査基準に基づく審査の水準についてさらに検討し、学位論文の審査の透明性・公平性を確保する。

2) 看護学専攻博士後期課程

博士後期課程では、高知県立大学大学院看護学研究科に関する規程等に示されている本研究科の目的、および博士後期課程の目的に沿って活動を行った。また、アドミッションポリシー(入学受け入れ方針)、カリキュラムポリシー(教育課程の編成方針)、ディプロマポリシー(修了・学位授与に関する方針)のもと活動した。

(1) 研究・教育力育成強化の取組み

① 授業評価について

授業の質の向上、質保証を目的として、授業評価を行った。課程の教務委員が年度はじめに学生に対してオリエンテーションを行い、目的および方法、内容等について説明した。今年度は、専攻共通科目 7 科目について、受講者全員に対して実施した。今後、毎年の評価結果を積み重ね、評価内容を分析し、授業の質向上、質保証に繋げていく。尚、今年度の評価結果の概要は、講義内容に関しては 5 段階評価で 4.94、講義方法は 5.00、学生の自己評価は 4.78、総合評価は 5.00 であり、学生の自己評価が前年に比べ若干低くなったが、全体的に見ると高くなり良好であった。

② リサーチ・アシスタント(RA)

リサーチ・アシスタント制度は、博士後期課程に在籍する学生が、本学教員の研究や研究プロジェクト等に参画し、研究のアシスタントの役割を担当することを通して、研究力の向上を図ることを目的として、平成 23 年度から導入されたものである。今年度は、博士後期課程の学生は全員社会人であったため、RA としての役割を担った者はいなかった。RA に参加した院生にとっては、教員の研究活動への参画を通して、研究手法を学習する機会となり、資料等の作成を通してグローバルな視点から看護を再考する良い機会となるため、学生の状況が合えばこれまでと同様に今後も行っていきたい。

③ 海外での活動支援、国際的な研究の推進

学術的な基盤を発展させるため、グローバルスタンダードで専門領域の知識や技術を研究開発し、国内外の専門職と連携して、国際的に活躍できる人材の育成に力を注いでいく必要がある。また、国際性や学際性を修得するためには、国際学会への参加・発表・国際的なセミナー・ワークショップ等への積極的な参加が有用かつ必要であり、そのため研究助成基金により経済的支援を行っている。今年度は、直接的な経済的支援はなかったが、課程の在學生や修了生が、タイのチェンマイで開催された第 23 回 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)に参加し、博士論文の一部の成果を発表している。

④ 国際性・学際性の強化

留學生対応として、前年度に導入した「インディペンデントスタディ」の科目運用について検討した。秋入学に対応して 10 月開講とし、翌年の 4 月まではこの科目を中心に、大学院での日本語の教育ができるように準備するなど、具体的な対策を検討した。

3) 共同災害看護学専攻博士課程 (DNGL)

令和元年度は、前年度に文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムの助成が終了したことから、今後の協働の方針を検討・確認するため、5 大学による学長会議を開催した。これまで蓄えて来た DNGL の資産を活用しつつ、今後も 5 大学協働して新しい災害看護学教育を継続することを検討した。また、前年度分の最後となった実施状況報告書の作成と報告、およびプログラム終了後の共同教育課程の運営に関して調査が行われ、それぞれ 5 大学協働で対応した。

また、次年度に向けた最後の入学試験の対応をするとともに、プログラム終了に伴い、令和 3 年度から災害・国際看護学領域を区分制博士課程で実現することとなり、ホームページで従来の共同災害看護学専攻の学生募集を停止すること、および新しい形で学生募集することを広報した。

(1) 新しい災害・国際看護学領域の創造

5 大学の学長会議で方向性を検討し、具体的に令和 3 年度から新しい形で、5 大学協働して 災害看護学の教育を継続することを検討した。概要は以下の通りである。

① 教育目的

教育目的を、これまでの DNGL の成果を踏まえつつ、以下の通り検討した。

災害・国際看護学領域(博士前期・後期課程)では、国内外で頻発する災害および近い将来に発生が予想される南海トラフの巨大地震、更には自然災害だけではなく、テロや新型インフルエンザなどの対策も急務であり、その為には、国際力そして学際力も備えたイノベティブな人材育成が必要であると考えている。そこで人間の安全保障を理念とし、日本や世界で求められている災害看護に関する多くの課題に的確に対応・解決し、国際的学際的指導力を発揮し、人々の健康社会構築と安全・安心・自立に寄与する災害看護グローバルリーダーを育成する。

本コースの特徴は、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムにおいて、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学とともに蓄積して来た災害および災害看護に関する資産を有効活用し、それぞれの大学院の強みを活かしたコンソーシアム科目を取り入れ、グローバルな授業展開をすることである。

② カリキュラム

a. 博士前期課程

・研究コース

<看護学専攻共通科目>

看護理論と実践、看護研究と実践、看護理論と研究Ⅰ、看護理論と研究Ⅱ、看護倫理、グローバルヘルス論(大学院共通科目)、データ分析方法論Ⅰ、疫学研究方法論

<災害・国際看護学: 専門科目>

災害看護論、グローバル社会看護論、災害・国際看護方法論、感染症看護セミナー、環境衛生看護セミナー、共生社会看護セミナー、人道支援看護セミナー、災害看護管理セミナー、災害・国際看護学研究方法Ⅰ、災害・国際看護学研究方法Ⅱ

※ 実践リーダーコースとの関係

領域専門科目は、実践リーダーコースの学生も受講できるように、研究コースの学生とも調整しながら、開講日程等を配慮する。

<災害・国際看護学: コンソーシアム科目>

災害看護活動論Ⅳ(備え)(高知県立大学)、環境防災学Ⅰ(高知県立大学)、災害看護対象論(兵庫県立大学)、災害看護フィールドワークⅠ(兵庫県立大学)、災害看護フィールドワークⅡ(兵庫県立大学)、看護政策学特論(東京医科歯科大学)、災害看護学特論(東京医科歯科大学)、災害看護学Ⅰ(基礎)(千葉大学)、災害看護学Ⅱ(展開)(千葉大学)、災害時専門職連携演習(千葉大学)、赤十字概論Ⅱ(国際人道法含)(日本赤十字看護大学)、災害看護学特講Ⅲ(日本赤十字看護大学)

・実践リーダーコース

<地域保健学領域>

災害・国際看護学領域は、実践リーダーコースにおいては「地域保健学」に位置付ける。

災害・国際看護ケア研究、地域保健学専門演習、地域保健学研究方法Ⅰ、地域保健学研究方法Ⅱ

b. 博士後期課程

<専攻共通科目>

理論看護学Ⅰ、理論看護学Ⅱ、看護学研究方法Ⅰ、看護学研究方法Ⅱ、看護倫理学、インペーション看護学、国際看護学、医学研究方法論、インディペンデントスタディ

<専攻専門科目>

災害・国際看護学Ⅰ、災害・国際看護学Ⅱ

<研究支援科目>

看護学特別研究Ⅰ、看護学特別研究Ⅱ、看護学特別研究Ⅲ

(2) 国際的・学際的科学活動の推進

インドネシア中部スラウェシにおける EpiNurse モデルの導入を 8 月 27 日-9 月 30 日に行った。地震、津波、および液状化により、2018 年 9 月 26 日にインドネシア、中央スラウェシ州のパル、ドンガラ、シギ、およびパリモ（パダギモ）地域が被災した。その後、復旧とリハビリのプロセスに関するさまざまな努力によって、ヘルスサービスを含むインフラストラクチャと公共施設は徐々に稼働を再開している。しかし、健康の迅速な評価と早期の症例発見は不十分で、既存のシステムでは、生存者の健康状態をリアルタイムで提供することさえできず、健康状態の更新には通常数ヶ月掛かっていた。このような状況において、健康の迅速な評価と早期症例発見システムの改善が重要となり、DNGL の神原教授が開発した EpiNurse を利用して、中央スラウェシ州緊急災害看護協会と中央スラウェシ州保健局と協働しながら、Padagimo 地域で予想される災害の予防活動の一環として EpiNurse モデルを導入した。インドネシアの DNGL 留学生のユディ・チャンドラがこの活動を主導し、調整した。

国内の国際的な活動としては、11 月 3 日に、インドネシアから短期留学しているガジヤマダ大学の学生も参加し、世界津波の日のイベントの一環として、高知県須崎市で災害対策活動を実施した。須崎市の住民、地域住民のキーパーソン、須崎国際交流協会代表、地域ボランティアなど、さまざまな方々のご参加を得た。この活動は、予想される津波に立ち向かうことができるように、避難所での生活を管理する人々の知識を向上させることに焦点を当てて行われた。また、ゲームを通して、避難所での生活の課題を想像し、それを一緒に議論して課題に取り組むことができた。

11 月 9 日から 12 日まで、第 2 回世界防災フォーラム/国際災害リスク会議が仙台国際センターで開催され、学際的な科学者、研究者、医療専門家が集まった。DNGL の学生のスシラ・パウデルとハストロ・ドウィナントアジが口演セッションに参加し、看護の観点から学際的アプローチにおける健康の安全性と災害リスク軽減のフレームワークについて発表した。

(3) 教育課程の深化

前年度の博士教育課程リーディングプログラム終了に伴い、これまでの成果を分析しつつ、カリキュラム運営に関して総括を行った。その結果を踏まえ、令和元年度から新カリキュラムに移行して、今後の教育の継続に対応することとした。

① 新カリキュラム

これまで、科目は 6 つの区分に分かれていたが、各科目の継続や統廃合を検討しながら「災害看護学の基盤を支える科目群」(16 科目)、「災害看護学の専門科目群」(11 科目)、「インディペンデント学修科目群」(10 科目)、「災害看護学研究支援科目群」(14 科目)の 4 つに分類された。旧カリキュラムでは、半期の科目のみであったが、これまでの共同教育課程の運営評価から通年科目も設け、より充実したカリキュラムとなった。更に、これまでは各科目が学年指定であったが、履修の自由度を上げるために、各科目の対象となる学年に教育効果も踏まえながら幅を持たせた。

新カリキュラム導入に伴い、旧カリキュラムから新カリキュラムへの読み替えも検討した。特徴的なものとして、旧カリキュラムの「災害看護学実習Ⅱ」と「災害看護グローバル演習」および「インディペンデントスタディ(演習)A～E」と「インディペンデントスタディ(実習)A～E」のいずれか 1 科目を、新科目の「インターンシップⅡ」で読み替えることである。このように、旧カリキュラムで要となっていた科目の長所を新たな科目で継承しつつ、科目の整理を行った。また、在学生の履修状況も踏まえ、旧カリキュラムの科目の継続開講も検討し、開講時期も考慮しながら 13 科目を継続することとした。

② 履修支援

学生の中には、授業の進行や在学中に携わる災害支援の経験などから、関心や志向する領域が変化する者もいると想定している。学生の各科目の選択に当たっては、各学生一人ひとりに配置されているアドバイザー教員により、履修相談を行った。新カリキュラムとなり、幅を持たせた開講期間を活用して、これまで以上に柔軟に履修することもできるよう、学生はアドバイザーや各科目の責任者との相談・助言を得て、履修計画を立てることができた。